

---

# 魔王様と暮らす日々

ゆうき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王様と暮らす日々

### 【Nコード】

N13210

### 【作者名】

ゆつき

### 【あらすじ】

ごくごく普通な女の子、朝倉三波が迷い込んだのは、さまざまな魔物が彷徨う魔界。そこで出会ったのは、紫の瞳がとても綺麗な、魔王様でした。普通な女の子と魔王様の甘い物語。

## ブローグ

「ここをこうして、こうすると…、ほら、花の冠の完成です。」

美しい花々達が咲き誇るこの花畑で、私は座り込んで一人の男性と

一緒にいる。

シロツメグサのような花を編みこんで、花冠を作った。  
それを相手の頭にそっとのせる。

紫色の瞳をきよとんとさせて、

頭の上に乗っているシロツメグサの冠に手でそっと触れた後、彼は  
それは綺麗に笑った。

その笑みを見て、私は確かにこう思ったのだ。

ああ、私は今、とても幸せなのだ、と。

魔王様と暮らす日々



## 紫色の腫

私は朝倉三波。あさくらみなみ

学力は普通、体力も普通、何もかも平均的なごくごく普通の中学三年生だ。

季節は秋。もう長袖じゃないと外を歩くのは寒いという感じの季節だ。

私は、親に勧められて受験対策のために塾に通っていた。

「はあ、寒い…。」

ふるり、と身を震わせる。



塾の帰り道、私は夜食にと公園の滑り台の上で肉まんを食べていた。寒い夜にはあったかい肉まんに限る。

さてと、帰るか。

はむはむ、と肉まんを頬張りながら滑り台の上から立ち上がった。明日は早いし、早く帰って寝なきゃ。

そんな事をぼーっと考えていたせいだろうか。

私は、滑り台の上で足を滑らせ、後ろ向きに倒れていった。

落ちる、という感覚に恐怖を抱いた。

落ちて、打ち所が悪ければ骨折してしまうかもしれない、なんて頭で考えながら

落下していく。ぎゅっと目を瞑った。

しばらくして、ぼむっと言う音がして、誰かに抱きとめられる感覚がした。

下に人なんていたのか、という思いが頭をよぎったが、痛い思いをしなくてホッとした。

目をぱちりと開いた。そこには

とてもきれいな紫色の瞳をした男の人がいた。

真っ白な花の咲いた花畑に、私と彼はいた。

あ、あれ？私、さっきまで公園にいたはずじゃ…？

おろおろしている私を、彼は抱きかかえたままじつと見下ろしている。

私は、彼を見上げ、疑問を問いかけた。

「あ、あの…、此処は何処ですか、？」

「此処は私の所有地だ。誰も入る事は許されない禁域だ。」

「あ、じゃあ私もいちや駄目ですね、ごめんなさい。帰り道、はどこにあるんだろう…。」

そもそも此処はどこなんだろう？

私のいた場所じゃない。勿論公園じゃない。

急に不安になってきた。

此処はどこ？なんで私は此処にいるの？なんで？なんで？

頭の中がぐるぐるして、なんだか急に泣けてきた。

ぼろぼろと涙が出てくる。

彼はそんな私を静かに見つめていた。

しばらくして、いつまでも泣いている私の目元に、手が添えられて涙が拭われた。

私がいよとして顔を上げると、彼と視線があつた。

「泣かないでくれ。」

低めの声は、静かに私の耳に響いた。

紫の瞳は何処までも無表情だが、心なしか少しだけ困っているような雰囲気があつた。

私の事を、心配してくれる人がいる、その事に、少しだけ安心感が出てきた。

涙をこしこしとぬぐって、彼を安心させるように笑みを浮かべた。

驚いたように丸められた目は、少しした後、にこりと優しく微笑んでくれた。

## 居場所

優しそうな人で嬉しいが、私はこの後どうしよう。

少なくとも、私のいた世界じゃなさそうだ。

どうしたらいいのかわからないが、

少なくとも私を心配してくれる人が一人でもいてくれる事が嬉しいか  
つた。

「あの、ここってどこですか、？」

もう一度、先ほどの質問を繰り返した。  
詳しく場所が分かればいいんだけど…。  
彼は、無表情な顔のままそう言い切った。

「此処は、魔界の魔帝の私の城、魔城だ。」

「……………へっ？」

一瞬、頭がフリーズする。え、今何て言った？

「ま、魔界…？って、あの、物語に出てくる…？」

「ちゃんと人間界もある。お前は、その住人ではないのか？」

「は、はい、そう、ですけど…、たぶん。」

「しかし、着ている服装が妙な物だ。何処から来た？」

「は、はい、日本からです、けど…。」

「ニホン？そんな土地は無かったと思うが…。」

「じゃ、じゃあやっぱりここは異世界…？」

どうしたらいいんだろう、私の知る場所じゃない…。

悩んでいる私に、彼は少ししてから口を開いた。

「行くあてがないのなら、私の城に来るがいい。」

「えっ…。」

「部屋等あまっている。人間一人増えたところで何もできないだろう。それに…、何故だか、お前は…、捨て置けない。」

……なんて優しい人だろう。知らない人にはついて言っちゃ駄目だと言われているが、この人にならばいい気がした。  
抱きかかえられていた姿勢からおろされて、向き合うように立った。



身長がとても高く、見上げないと視線が合わない。  
首がちよっと痛かったけど、そんな事構わなかった。

ずっと、手が差し伸べられた。

私は、ためらいながらも、その手をとった

。



## 言葉

その後は、驚きの連続だった。

彼に抱きしめられたかと思うと、瞬きをした一瞬で景色が変わっていた。

そこは、洋風の、王様とか王子様とかが使うようなお部屋だった。

きょんととしていれば、彼はすたすたと移動してキングサイズのベツトに私を下した。

「今日から、此処がお前の部屋だ。」

えっ！

「ほ、本当にいいんですか？」

「いいと言っている。」

「どのだれかも分からないような輩です、よ……？」

「……………欲しいと思った。お前を。」

……………はい？

何を言っているのか、さっぱり分からなかった。

ただ、……………嫌じゃないただけ。

でも、言ってる意味がよく分からない。

「あのっ、それってどういう意味でしょうk

その時、ばん！と勢い良く扉が開かれて、声が遮られた。

「魔王様！こんなところにおいででしたか！」

.....  
魔王様？



私

ええーっと、魔王様って、あの、ファンタジー小説に出てくる、魔王様？

きょとした表情で、私は彼を見た。

彼も私の視線に気づいたのだろうか、こちらを見た。

「えー…っと、魔王様、？なんです、か？」

良く分からないから聞いてみた。

「ああ。」

と返ってきた。…み、短い…。

えーっと、よく分からないけど、偉い人って事でいいのかな？



うん、きっとそうだよね、なんかあの人たちも様付けで呼んでだし、私も魔王様ってよばっかな。

とりあえず、抱き抱えられたままのこの状態をなんとかしないと。

「えと、有難う御座いました。もうおろしてくださって大丈夫です、よ。」

そうやって言う。

相手はなんだかすごく残念そうな表情を浮かべている。

し、仕方ないじゃないか、！

抱きしめられたままって結構恥ずかしいんだぞ、！

他の人たちもいるし…！

そ、そんな目をしたって駄目な物はだめなんだから、！

無言の攻防戦を繰り返していれば、彼はやがてはあ、とため息をついておろしてくれた。

おお、やっと…。素直になってくれた、有難う！

「えー…、お取り込み中の所申し訳ありません、魔王様、この娘は…？」

眼鏡をかけた、緑色の髪をした男の人がそう問いかけた。  
取り込み中じゃないぞ、安心していいから！

「拾ってきた。」

……うわぁー…、簡潔…。いや、間違いではないのだけど。

「そんな娘をどうするつもりですか？」

うわっ、そんなこと言われたら困る。

私は、どうすればいいのだろう？

「……………」。

ほら、魔王様も黙っちゃったじゃないか！  
どうしよう、私は邪魔なのかな？

此処にいちゃ、だめなのかな？



此処に

此処にいてはいけない、といわれたら、やっぱり出ていくしかない。  
でも、どこに行こう？  
きよろきよろと視界をめぐらす私は、不意に逞しい腕に抱きしめられてしまう。

他の誰でもない、魔王様の手によって。

えええ、！？なに！？なに？！

後ろから抱きすくめられているので、魔王様の顔は見えない。

「ま、魔王様？どうかしたんですか？」

そうやって一応問いかけてみる。

くると、体を相手と向き合うようにされた。紫の瞳と視線がぶつかる。

「逃がさない。」

一言、それだけ呟かれた。

とたん、ぞくりと背筋が震えた。

本能的に、というのはこういう事を言うのだろう。

怖い、と切に思った。

ぎゅう、と強く抱かれる。壊れてしまいそうなほどに。

でも、それを居心地がよいと思ってしまふ私もどこかにいて

「この娘はこの城に置く。いいな。」

え？

「……御意。」

え？

な、なんか話が勝手にすすんじゃってるみたいだけど、いいのかな？  
さっきの従者？ みたいなの、反対みたいだったけど、いいのかな？  
従者さんの方に視線をやった。

ぱっちりと視線があつたのに、ふい、と俯かれ視線は外された。

な、なんだかショックだ……。

改めて魔王様の方に振り返った。

紫色の瞳の彼は、相変わらず無表情のままだ。

でも、その表情さえ、どこかやさしいと思えるほどで。

「わ、私、此処にいてもいいんですか？」

「ああ。」

「迷惑かけちゃうかもしれませんよ…？」

「構わない。」

「わ、私なんかを…、」

ふいにそこで、言葉を遮られた。

「お前だから、ここに置きたい。」



胸がじんわりと暖かくなったのと同時に、とくと胸が跳ねたのは、  
きっと気のせい。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1321o/>

---

魔王様と暮らす日々

2011年1月4日02時53分発行